

木津川筋の治水の考え方 (たたき台)

平成14年7月31日

木津川筋の治水の考え方

- 中間とりまとめ
- 河川管理者との質疑
- 共通認識
- 木津川筋の現状

中間とりまとめ（委員会）

1. 今後は、いかなる降雨においても、壊滅的被害の回避を優先的に考える。すなわち、人命が損なわれることなく、また、家屋などの資産の損失は可能な限り少なくすることを目標とする。
2. そのためには、破堤回避対策の実施が必要である。また、洪水という自然現象を対象とするため、破堤回避の対策も万全でないことを十分認識し、万が一に備えて危機管理を行う必要がある。
3. 破堤回避対策を実施した場合、降雨状況によっては、ある程度の越水を想定する必要がある。こういった点を考慮した、したたかな街づくりを進める必要がある。

中間とりまとめ（委員会）

4. また、ある程度の堤防越水があると予測される場合、これに対応した社会制度上の対応策の検討が必要と考えられる。
5. 上下流の問題（琵琶湖・洪水調整ダムの水位管理、狭窄部の開削等）はそれぞれの地域の地理的・歴史的経緯や環境の保全などを踏まえ、総合的に見て最善となる対応を常に考える必要がある。

中間とりまとめ（淀川部会）

計画・施策の考え方等の変革

＝水害防止から被害軽減へ

連続堤を築き、堤防を高くするといった長年の努力にもかかわらず、いまだに水害の発生を完全に防止するには至っていない現実を我々は強く認識しなければならない。

河道の付け替えや拡幅などの大規模改修は現実的でなく、堤防を高くすることも潜在的な危険性を増すため採用しにくい。したがって、土砂でできた脆弱な堤防の強度を高めることにより、堤防を越えるような異常な洪水に対しても壊滅的な被害をもたらす破堤を避けようという方策が必要。

中間とりまとめ（淀川部会）

整備計画

治水計画の考え方を「水害防止から被害軽減へ」と変革したからといって、水害防止を放棄するものでない。「現実問題として、水害を完全に防止することはできない」という認識のもとで、「治水対策としては、防止対策を進めるとともに、軽減対策も実施しなければならない」ということを意味している。